

海外視察研修報告：
米国ハワイ州における母子医療と福祉の変遷

井上明子, 小嶋理恵子, 枝川千鶴子, 豊田ゆかり

愛媛県立医療技術大学紀要 第15巻 第1号抜粋

2018年12月

海外視察研修報告： 米国ハワイ州における母子医療と福祉の変遷

井上明子*, 小嶋理恵子*, 枝川千鶴子*, 豊田ゆかり*

A Report of the Study Tour: Changes in Maternal and Child Healthcare and Welfare in the State of Hawaii, the United States

Akiko INOUE, Rieko KOJIMA, Chizuko EDAGAWA, Yukari TOYOTA

Keywords:海外視察研修 母子医療・福祉 ハワイ州文化

序 文

日本における総在留外国人は、年々増加してきている。法務省¹⁾は、2017年12月に3,179,313人の在留外国人が存在していることを公表している。その実態調査においても平成27年度に外国人の受け入れをしている医療機関は外来部門で79.7%、入院部門で58.5%であり、その半数以上が英語を母国語とする外国人の患者としており、厚生労働省²⁾は、近年の在留外国人や訪日外国人が増加している現状や「未来投資戦略2017」などを受けて、外国人が安心・安全に日本の医療サービスを受けられる体制を充実させていくことの必要性も訴えている。

しかし、医療現場では様々な困難感を実感しており、その主な内容として、言葉の壁や文化の違いを実感していることを述べている^{3),4),5),6)}。そのため、中川ら⁷⁾は、わかりやすい言葉の使用、ジェスチャーや絵を描く、筆談を取り入れるなどをしてコミュニケーションを工夫していると報告している。その他、野地⁸⁾の報告では外部通訳サービスの利用や看護部の国際交流を進める対策をとっている施設もある。

そのような現状を踏まえ、看護教育の現場においても異文化を理解しケアに当たることが求められている。そこで、嶋澤ら⁹⁾は外国人模擬妊産婦とのコミュニケーション演習を行い、コミュニケーションの種類や方法について相手に安心感を与える姿勢や態度などを養っていることを報告しており、助産学の教育現場においても外国人と交流することの導入が進められている。

本学においても、保健科学部の教育目標に医学・医療技術の進歩発展や、保健医療に対する社会の変化・多様

化に伴う要請に柔軟に対応しうる人材を育むとしている。また、助産学専攻科のカリキュラムポリシーとして母子や家族に寄り添い、多様な対象や活動の場における助産実践力を高められる授業や実習を展開するとしており、これは異文化社会で生活する外国人の母子やその家族も包含する。

そこで、学生たちへ異文化を伝え、外国人の母子への支援の一助となる教育を行うことを目的とし、様々な文化を持つ人々が暮らす米国ハワイ州において、どのような医療や母子に対する支援が行われているのか、またその支援のルーツをたどることを目的とした研修を行ったので報告する。

本研修の目的

本研修の目的は、①日本人助産師が移民としてハワイ州でどのような生活や活動をしていたのかを知ること②社会的ハイリスクにある女性への支援③小児病院を見学し、日本と米国の生活背景の違いから見える子どもの疾患と治療の違いを知ること等であった。

海外視察研修に至るまでの経緯と日程の概要

研修に至るまでの経緯としては、まず助産師資格を有し、ハワイ州において主に母乳育児支援を行っている日本人に研修の目的を説明し、研修支援の協力を得ることができた。

そして、この研修のファシリテーターとして快諾していただき、視察を希望する施設である Hawaii Plantation

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

表 1 . 海外視察研修日程

月 日	スケジュール
3月20日 (火)	ホノルル空港到着後、スケジュール確認後ホテルへ移動
3月21日 (水)	Mary Jane Program Shelter 訪問 Kea'iwa Heiau State Recreation Area 視察
3月22日 (木)	Shriner's Hospital 訪問
3月23日 (金)	Hawaii Plantation Village 視察 Kukaniloko Birthstones 視察
3月24日 (土)	ハワイ州ホノルル地域視察
3月25日 (日)	ハワイ州ホノルル地域視察
3月26日 (月)	ホノルル空港発、成田経由松山空港着

Village, Mary Jane Program Shelter, Shriner's Hospital, Kea'iwa Heiau State Recreation Area, Kukaniloko Birthstonesへの施設交渉と日程調整をお願いし、承諾が得られた。

研修日程については表1に示す。

施設訪問

1. Hawaii's Plantation Village 視察

ハワイは砂糖のプランテーションが盛んであったが、ハワイ原住民は外国人がもたらした伝染病などで急激に人口が減少し、労働者が不足し始めたとのことであった。そのため、プランテーションの所有者は、安い労働力を求め、最初に砂糖精製に多少技術のあった中国人を導入し、その後ポルトガル、日本、韓国、ノルウェー等から労働者として主に男性の移民を導入した。最初の日本人移民は1868年に153名がイギリスの船で来訪し、その労働者の花嫁相手として約2万人の女性が写真花嫁としてハワイに渡米したとのことであった。

1) 日本人助産師の活動

ハワイでの助産師の変遷について説明と展示物から理解を深めた。

1924年、写真花嫁として日本人助産師のTANJIさんという女性が中国人、フィリピン人、韓国人、ハワイアンを仲間とし5人目の産婆としてやってきたと言う。1930年代はアメリカ、イギリス、ドイツ、ノルウェー、スウェーデン、日本の助産師学校を卒業したものを助産師として認めるとしていた。1931年には、168人の助産師を認可したが、その後、病院の出産が勧められ第二次世界大戦後には、日本人は夜間の外出制限を強いられたことから、より一層、病院での分娩が増加し、助産師として活動する女性も減少した経緯があるとのことであった。

2) 分娩に関する文化の違い

TANJIさんは様々な文化を持つ助産師と活動することで、胎盤処理や食事、分娩の備えに関する違いについて以下のような説明がされていた。

(1) 胎盤処理に関する考え方の違い

ハワイアン：子どもが誕生地に根ざしている（子孫繁栄）ことを確認するために、胎盤上に樹木を植える。

中国：胎盤を埋めることで赤ちゃんの将来に害を与えないようにする。

フィリピン：悪魔を追い払うためにオレンジの葉を一緒に埋める。

日本：感染予防のため胎盤を慎重に洗って葬る。



写真 1 : Hawaii's Plantation Village 視察

日本人助産師のTANJIさんが現地で活動した様子が展示されており、その展示物における説明を受けている様子。

(2) 食事に対する考え方の違い

ハワイアン：塩辛い、辛い、血まみれの食べ物は食べない。赤ちゃんの体重を抑えるために、澱粉質の食品を制限する。

フィリピン人：イカのあしが赤ちゃんを捕まえるので、イカを食べることを避ける。分娩の際の力になるので、砕いたミミズを食べる。

日本人：タンパク質と鉄分が高い食品を食べる。澱粉質、甘味、ガス形成食品を避ける。

(3) 分娩の備えの考え方

ハワイアン：あなたが無視した人々からの許しを求めなさい。悪感情は、難産を引き起こします。

日本人：寺院で祈ってください。悪魔を払いのけるために、お守りを持ち歩きなさい。

2. Mary Jane Program Shelter訪問

施設コーディネーター及び施設退所後の支援に関わっている担当者から施設の概要と支援の具体的内容及び施設見学で以下の説明を受けた。

Mary Jane Program Shelterは、結婚しても子どもを産むことができない10代の女性に対し自宅を開放したことごとく始まる。カトリック系のドミトリーを利用し、1985年にはカリヒに15ベッドがあり利用していた。シスターたちが、毎日の生活の中で家を貸すだけでなく、メンタルヘルスなど欠けているサポートの必要性に気づき、プログラムが作られていった。15人という大人数でなく、小さいサイズにして個別性を重視し、内容が充実したものとなるよう始めたのが、このメリージェーンである。1970年～1990年は子どもを養子に出すという方法しかなかったが、新たなプログラムを実施することで、子どもを養子に出さずに傍に置く人が増えたとのことであった。アメリカは家庭内暴力があると接見禁止ができるような制度がある。昔は地元の人ばかりが主に利用していたが、現在は国際的であり本土の人が多く、旅行に来て知り合い、望まない妊娠をしたという状況もあるとのことであった。施設の運営は、メリージェーンという大きな組織の中の一つの施設であり、寄付の利子で賄っており国や州から資金を得ていないとのことであった。

施設は6部屋でベッド、ロッキングチェア、トイレ、ベビーベッド、シーツなど生活に必要な物が揃えられており、対象となる母親が来られたらすぐ生活ができるようになっている。メリージェーンを利用する母親は年間16人ほどであり、40歳までの人が利用した経験がある。

予定外の妊娠をした人や妊娠したくなかった人、妊娠中のサポートを受けてない人、不健康な状態(虐待・アルコール依存症・薬物依存など)の人がいるとのこと、75%が性的虐待の人であるとのことであった。その為、この施設のセキュリティーについては、厳重に管理

されており、ドメスティックバイオレンスの加害者に場所を知られた場合は利用施設を変更するなどの対策を講じている。また、面会はさせず、外出後の帰宅についても毎日変わるセキュリティー番号を利用し入退室を管理している。妊娠が発覚した時からここにいる場合もあるが、出産後4か月までの期間は入所が可能で、家族計画(望まない妊娠を防ぐため)の支援も行っているとのことであった。ここに来るまでのプロセスとして、まず社会復帰の可能性がある人だけが応募でき、利用希望者や直接、産婦人科や精神科等から電話などの連絡があり、書類審査(収入・精神状態・家族・子どもについてなど)、マッチングをして面接を行い、空き部屋があれば受け入れることができる。この施設は、妊娠している母と子だけの施設であるため上の子がいる場合は、通常は他の家族が見ている。

ここに入るためには、自分のことを責任を持ってやっていくということが大切で、グループで生活していく中で、その人が成長しようとしているかどうかということが大きなポイントと言える。たとえ、精神疾患を持っていても、入所期限の4か月以降で社会生活ができるように家を探すなどのサポートまで行っているとのことであった。

ここでは、親としてどうするかという教育が多い。主に母親になる準備(母親が、子どもがいる生活を自覚し自立していく準備)を行っており、学校や仕事に行くことも勧め、社会性の自立を目指している。例えば、金曜日に外泊し日曜に戻ることも認めており、母親は学校や仕事とは違った時間を過ごすことも可能としている。門限を22時とし、週に1回程度、個人やグループでセラピストを行っているとのことである。

施設での母親の支援プログラムの一つに、施設内だけで使えるクーポンを発行している。これは、毎日の出勤や通学など、社会での慣習に倣うことができればクーポンを発行するが、ルールを守らなければクーポンからマイナスするシステムにしている。このクーポンは、枚数に応じて寄付された服やおもちゃなどの生活用品と交換することができる。施設利用料は、母親が仕事をしていない場合すべて無料になるが、仕事をしている場合は給料の1/3または、200\$以下を払う必要がある。このクーポン制度は、自分自身の現金を貯金して欲しいという思いがある。貯金をするのも社会で生活するには必要なことであり、自分のことは自身で責任を持つという教育理念を持ち支援していることが語られた。

この施設では親から愛されなかった経験から、子どもに対してどう接していいかわからないということもある。中には、自分自身がバースデーケーキを貰った経験がない母親もいることから施設の中では誕生会を行い、ここで学んだことを母親となってわが子と同じこと



写真2：Mary Jane Program Shelter訪問

Mary Jane Program Shelterに訪問し、施設の概要や入所中のルールについて見学をしながら説明を受けている様子。

ができるように関わっている。そうした女性たちの力を見出す事、社会に出て自分の価値を見出す事が出来るよう女性のエンパワーメントをつけていくことが重要であり、ここでの大きな仕事の一つとして考えられている。

米国ではWIC (Women, Infants, and Children) というサポート体制があり、5歳まで栄養サポートをするシステムや国のサポートシステム、ソーシャルワーカー、クリニック、保健センターなどのサポートがある。その為、この施設で過ごした後社会へ出る準備としてもう一つ、ハワイ大学の近くに同じ系列の機関がある。多くは生活保護を受けており、母親へは、定職につけるまで金銭的な援助600\$, キャッシュで300\$ 食べ物だけを買える支給がある。

ハワイの法律では、母が子どもといて暴力的な夫と暮らしていると、その母親は子どもを守る能力がないという判断をされ、子どもは州に預けられてしまうとのことであった。ここでは、ダメとは言わず母親に自分の価値を教えることで、その男性といるとだめだということを知ってもらおうように支援していると語られた。

この施設のスタッフは陣痛が始まったら生まれるまで一緒にいて、母親は出産したらここに帰ってくる。寝たい、授乳が大変、体が痛い等々にはいつでもスタッフに電話して、助けてもらうことができる。妊娠中からここに来ることによって、個々の生活やお産するのも対応でき、事前にうつになるかもしれないと手を差しのべることができる。もし、妊娠前から精神疾患など診断されている人の場合であっても、妊娠中は薬が飲めないため、それに対するケアも行い生活支援も行っている。

精神的ケアとして具体的には、精神科医のところに行き、セラピストに毎週会ったり正しい量の薬を飲んでるか、母親としてきちんとケアができているか、精神的に

躁鬱でないか、赤ちゃんが泣いたときにどのような対応をしているかなどをチェックし、放置している場合には精神的な部分からくることがあるので、細やかにチェックしている。

日本では「赤ちゃんポスト」というものがあるが、そのようなケースに対してハワイでは、消防署が対応しているとのことであった。この背景に、救急より消防が多いため、消防がアセスメントして救急対応しているとのことであった。ハワイでは、児童保護について法律があり、何かあると子どもを保護すると定められていることから、まず警察に届け、児童福祉が関与し緊急里親へと速い対応がされているとのことであった。

メリージェーンでは全員のスタッフが、母親支援に対するトレーニングを受けており、常設セラピストもいるとのことであった。中には、専門知識を持っているスタッフもいるため、母親が病院受診の時には一緒に受診し、どのように指導されているかを確認している。そして、自分の感情をうまく表現できない自尊感情の低い人には自分自身のことを語らせるサポートを行い、自尊心を高めるように支援していると語られた。

ここでは家具の準備や子どもの成長、学習状況、保育園のお金などのサポートをしている。しかし、この施設を出ると社会の中に入るため、母親同士のコミュニティを紹介し、子どもたちの学習能力や発育、学校に行くために子どもや大人とのコミュニケーションの状況、発達障害の有無等を見て、その個人に必要なサポートをしているとのことであった。

入所前、母親の薬やアルコールなどの摂取に起因し、子どもの成長段階で問題が生じる場合もあるためフォローが必要だと言う。その発達障害の原因を発達検査を利用してアセスメントし、子どもとの遊び方を教え、1週間単位で変化を見ていき、幾か月に渡り変化がない場合には発達障害と判断している。しかし、コミュニケーションが取れない原因として子どもが聴力障害を持つ場合もあり、検査で異常が指摘される場合は、そこから次につなげることも必要になる場合があるとのことであった。

3. Shriners Hospital 視察報告

Shriners Hospitalは、子どもの整形外科および火傷に特化した病院である。6人の子どもを持つシュライナー夫婦が今後、遺産で子どもたちの関係が壊れていくことを懸念し、敷地と土地を寄付することにした。検討を重ね10年前にShriners Hospital Groupの許可のもと病院施設に至った。

敷地面積は70エーカー(1エーカーが約4,047平米)あり、世界各国からの患児も受け入れている。主に太平洋沿岸地域から来ており、運ばれる際の旅費や生活費もす

べてシュライナーの寄付で賄われている。

本施設は、病院としての施設だけでなく遠方から治療が必要で来た子どもの付き添いや、その後のリハビリを行う必要のある子どもとその母親が宿泊できる宿舎（17部屋）も併設されているとのことであった。

1) 子どもたちと親の心理的ストレスの軽減

世界各国から異文化の土地で治療する子どもたちに対し、親と一緒に暮らすことが可能な場を提供している。宿泊施設は4カ月利用している母子もおり、衛生的かつ快適な設備がされている。また、入院中の子どもの緊張を解くため、階毎に南国の海や陸のテーマで装飾されており、1階は海をテーマにハワイの海で生息している様々な魚や海藻が壁や床面に描かれており、2階は陸をテーマにハワイで生息する色鮮やかな鳥や動物のイラストが病室や廊下の壁紙、床面にデザインされていた。

そして、車椅子の子ども達への配慮もされており、車いすでも容易に通ることができる広さの空間が病院各所に見受けられた。例えば、玄関ロビーにはC型に作られた水槽が設置されているが、子どもの目の高さに合わせて魚が泳いでいることから、まるで海の中にいるような雰囲気を感じることができる工夫がされていた。その他、図書室やカフェテリアなどもロビーに隣接し設置されていた。カフェテリアは院外からの利用も許可しており、近くの高校生はファーストフード店より安いと好評を得ているとのことであり、疾病を持つ、持たないに関係なく、地域の子も達すべてのよりどころとなる施設であると感じた。

2) 診療における特徴

1階で外来診療やリハビリ科が設置されており、2階は主に病室、遊びを取り入れながらセラピーが可能な場所も設置している。

(1) 診療

子どもたちが日常生活する環境によっては、虫歯により口内に炎症があるケースもある。主病名の治療の妨げになる場合もあるため、まず歯科治療を行い、2週間後に主病名の治療を行うこともある。しかし、口内を見られた経験がない子どももいることから、安静な状態で治療ができるよう全身麻酔を使って治療する場合もあるとのことであった。

(2) 放射線科

子どもを対象とした施設であるため、少しでも動かない時間を確保するため、天井に動物の絵が描かれている。また、被爆量が最小限になるような新しいシステムを取り入れることを予定している。

(3) 遠隔治療

世界各国の子どもたちの診療を受け入れている本施設は、担当医師の勤務する時間帯でカメラを通じて国をまたいで診療支援も行っている。症状を確認後、相手の医

師に対して治療のアドバイスを行うことのほか、必要であれば搬送を受け入れているとのことであった。

(4) リハビリテーション

貸し出し用車いすは、国内外に関わらず無料としている。リハビリテーションの補助で欠かせない下肢のギプス作成も、院内の1室で行われている。ギプス作成は、専門の資格を習得している2～3名の技師が毎日勤務し、作成に当たっている。このギプスで工夫されている点は、子どもたちの足のサイズに合わすことは勿論、好みのイラストが印刷されその子だけのギプスを作成しており、裸足の習慣の子どもたちにはギプスの足底部に靴底を付け靴のない生活でも歩行が助けられるように工夫されている。

4. Kea'iwa Heiau State Recreation Area 視察

ハワイ古代の祭祀場・祈禱所で、薬草や祈禱によって病人を治していたという古代ハワイの医療の場であったという Kea'iwa Heiau State Recreation Area を視察した。周囲は石が積み重ねられており、その場の至る所にティーリーフと呼ばれる植物が供えられていた。この地ではこのティーリーフを用いてお供え物を包んだり、魔除けのお守りとしても使用されるとのことであった。

5. Kukaniloko Birthstones 視察

ハワイ州の出産に関する習俗を知る目的で、Kukaniloko Birthstones の見学を行った。古来ハワイの王族の出産場所として11世紀～18世紀までの約700年間に渡って続けられ、現在も保護されている。この、Kukaniloko の岩には産みの苦しみをやわらげる不思議な灵力（マナ）があるとされ、ここで生まれた子は偉大な力を得ると言われており、現在もレイと呼ばれる装飾品がいたる所の岩の上に備えられており、安産を願い訪れる人も少なくない様子が伺えた。



写真3：Kukaniloko Birthstones 視察

Kukaniloko Birthstones を視察し、古来ハワイの王族の出産場所であることの説明を受けた。

ま と め

今回、多民族地域であるハワイ州で5施設の視察・見学を行った。

経済産業省の外国人患者受入状況アンケート¹⁰⁾において、外国人患者の受入れを実施するにあたっての課題として、多言語・異文化への対応が困難が最も多い結果であったとしており、異文化を理解できる看護職が求められていることが示唆された。ハワイ州では公的支援を求めるだけでなく、現在の公的支援を有効に活用し、市民で各々の専門性を発揮し困窮者を援助することが当たり前となっていることに感銘を受けた。

今回の視察研修では、異文化を感じ、社会で連携し母子を支援している実際に学ぶことができた。日本でも地域包括支援事業が開始し、母子の分野においても異文化を持つ母親たちが社会の中で安心して育児ができるよう、連携した支援が求められている。今回、貴重な経験をさせていただいたことで教育や研究活動において有益なものとなった。

引用文献

- 1) 法務省HP(2018/08/07)：在留外国人統計. http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html
- 2) 厚生労働省HP(2018/11/23)：「医療機関における外国人旅行者及び在留外国人受入れ体制等の実態調査」の結果. <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000173230.html>
- 3) 友田隆子, 中島美津子(2018)：異文化看護に関する研究動向から見る日本の看護教育の課題～日本の看護のグローバル化とダイバーシティ～. 看護, 70(3), 94-97.
- 4) 橋本秀実, 伊藤薫, 山路由実子, 他(2011)：在日外国人女性の日本での妊娠・出産・育児の困難とそれを乗り越える方略. 国際保健医療, 26(4), 281-293.
- 5) 寺岡三左子, 村中陽子(2017)：在日外国人が実感した日本の医療における異文化体験の様相. 日本看護科学学会誌, 37, 35-44.
- 6) マルティネス真喜子, 畑下博世, 鈴木ひとみ, 他(2017)：在日ブラジル人妊産褥婦の健康に影響する社会文化的要因. 国際保健医療, 32(2), 69-81.
- 7) 中川恵子, 多久和典子(2012)：地域における外国人医療の現在と今後への展望. 石川看護雑誌, 9, 23-32.
- 8) 野地有子(2015)：病院と看護の国際化に向けた文化対応能力の評価. 日本看護評価学会誌, 5(2), 74-78.
- 9) 嶋澤恭子, 宮下ルリ子, 平田恭子, 他(2017)：助産師教育における外国人妊産婦とのコミュニケーション演習. 神戸市看護大学紀要, 21, 87-93.
- 10) 経済産業省HP(2018/11/26)：国内医療機関における外国人患者の受入状況の把握. http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/downloadfiles/Questionnaire.pdf

要 旨

様々な文化を持つ人々が暮らす米国ハワイ州で母子を支援している施設を訪問し視察した。そして、ハワイ州が多民族となった経緯や医療の歴史を学ぶ機会を得ることで、日本人助産師が渡米することとなった経緯や、その助産師が行ってきた活動を知ると同時に、施設分娩へ移行した経緯も理解することができた。また、女性を取り巻く社会的問題は日米関係なく発生しており、公的支援を有効に活用し、市民で各々の専門性を発揮し困窮者を援助することが当たり前の社会となっていることに感銘を受けた。そして、日本では当然とされている歯磨きをすることや靴を履くなどの生活スタイルが世界においてはそれが当たり前ではなく、その生活や文化の違いがもたらす子どもの健康への影響など、子どもの専門病院である Shriner's Hospital では学ぶことができた。それらの学びと同時に、ハワイ州の医療発祥の地である Kea'iwa Heiau State Recreation Area 等へも見学の機会を得たので報告する。

謝 辞

本視察研修を実施するにあたり、ご協力いただきました関係者の皆様に深く感謝いたします。

本研究はJSPS 科研費JP26463399の助成を受けたものです。

利益相反

本報告における利益相反はない。